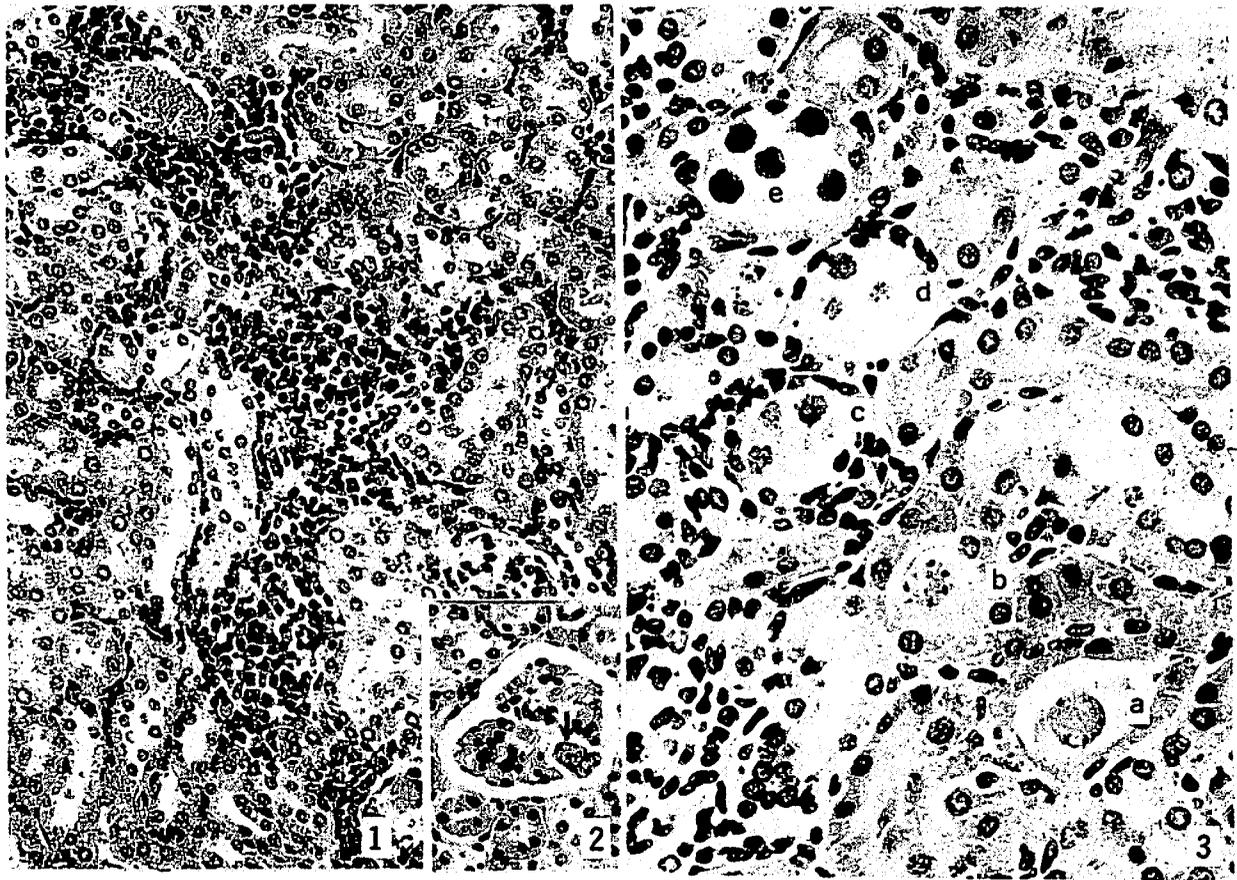


マウスの腎

東京大学医科学研究所獣医学研究部出題 第17回獣医病理学研修会標本No.263



動物：OMA系マウス♂4週令。

病歴，剖検所見：ある研究所で，東南アジア由来の野生マウス飼育コロニーに1976年6月，耳介壊疽が多発した数例中の一例である。外耳病巣のほかには脾腫，肺炎，中・内耳化膿巣をみとめ，中・内耳病巣からはネズミコリネ菌およびブドウ球菌が検出されたが，血清学的検索では，ネズミコリネ菌，気管支敗血症菌，Tyzzer菌，マイコプラズマ，センダイウイルス，MHVに対する抗体は検出されなかった。

病理組織学的所見：糸球体の萎縮，尿細管腔の拡張，間質への細胞浸潤が顕著にみられ（図1），糸球体細胞数の減少，核濃縮が見られた。尿細管上皮は変性におちいり，拡張した管腔内に尿円柱がみられた。間質には，多くのプラズマ細胞の浸潤がみられ，Russel小体もみられた。糸球体，変性した尿細管上皮細胞内あるいは尿細管管腔内にKlossiella murisの種々の形態がみとめられ，糸球体には，細顆粒を含有するシゾゴニーが見られた。

（図2）はガメトサイトの幼若型で，これは曲尿細管上皮細胞内にもみとめられた。さらに，スポロント（図3-a），母スポロプラスト（図3-b），娘スポロプラスト（図3-c），スポロシスト（図3-d），および

金平糖型のスポロゾイト（図3-e）の各発育段階もみられた。糸球体はコンゴールレッドによるアミロイド染色は陰性で，ときにmesangiumのわずかな増生が認められ，萎縮した糸球体では，PAS陽性物質が多量に沈着し，Bowman嚢基底底部はわずかに肥厚していた。

膀胱粘膜上皮の一部は剝離し，固有層，筋層にリンパ球，あるいはプラズマ細胞を主体とした細胞浸潤がみられ，粘膜上皮細胞内あるいは管腔には膀胱線虫（*Trichosomoides crassicauda*）がみられた。そのほか，肝臓で中心静脈周囲に，肺では細気管支炎あるいは血管周囲に，プラズマ細胞を主体とした細胞浸潤がみられた。また，耳介壊疽部の表皮には痂皮形成，固有層には好中球を主体とした細胞浸潤がみられた。Twortらは*Krossiella muris*感染では致命的障害は受けないとしているが，今回，われわれの提出した例ではかなり激しい腎炎と間質のプラズマ細胞浸潤が認められたことは興味深く，これらの病変は寄生虫原虫と直接関連があるように思われた。

診断：*Krossiella muris*の寄生をともなうプラズマ細胞性間質性腎炎。